天文学とプラネタリウム 第78回

10月23日、六本木ヒルズにて観月会を開催！

今月のお題

宇宙でつながる世界

20年ぶりに読んだ「イリアス」の放つ不思議な魅力。そこに隠された秘密はなにか。天プラの挑戦は続く。

高梨直紘（東京大学）
平松正顕（台湾 中央研究院）

www.tenpla.net

今秋から始まった舞台「イリアス」に向けてなにか簡単なコラムを書いてほしいということで、おぼろげな記憶を強化すべく、20 年ぶりくらいに「イリアス」を読みました。トロイアの木馬で有名なトロイア戦争を題材にした物語といえば、なんとなく雰囲気はわかるでしょうか。子供のころに読んだのは話の流れだけを追ったまさに子供向けの本だったのですが、今回読んだのは岩波文庫版の完訳。いや、おもしろかった。まさにギリシャ神話の世界と言うべき、イメージ通りの美しくドラマチックなストーリーがあるかと思えば、大人になった私の感覚からは「？？？」としか思えない楽しいやりとりがなされ、読む者を飽きさせません。臆当て以外に誉めるところはないのか？皆さんにもご一読をお勧めします。

さて、その魅力的なイリアスですが、物語の中には敵対するトロイヤ方、アカイア方の人間たちに加え、大神ゼウスを頂点とするオリュンポスの神々が続々と登場します。人と神がたがいに交差しながら、ドラマを創っていくあたりは、まさにギリシャ文学の真骨頂。そして、その舞台装置として、星空に神々の世界を投影したギリシャ人にとって、宇宙と人間はとても近しいものだったのでしょう。両者は互いに隔絶されたものではなく、初期の天文学、哲学、神話を通じて、密接に関係しあっていたものだと想像します。

この関係は、実は現代に生きる我々にも連綿と引き継がれているように、私には感じられます。宇宙というキーワードが貫くものたち、例えば天文学や神話であったり、あるいは星占いのようなものまで、ギリシャ時代に比べればそれらの間のつながりは薄まってはいるものの、相変わらず無関係ではあり得ないと思われるのです。私たちがもう忘れてしまったつながりもあれば、これから発見されるつながりもあることでしょう。私たちが宇宙に感じる魅力の源泉は、無意識下でどのような構造をなしているのか。その構造はひとつではなく、ひとりひとりに独特のあり方があるでしょう。その構造を知ることは、宇宙に関連する全てのものごとの魅力を、より高めてくれることにつながると思います。

私たちが天文学の魅力を伝えたいと思ったときに、その伝え方はひとつではありません。伝えたいと思った相手に合わせ、さまざまなつながり方が試されるべきです。そのような視点から天文学普及のあり方を考えることで、新しい道が見えてくるのではないか。本を読みながら、そんなことを考えさせられた、初秋の昼下がりでした。

ロンドン散策中にみつけた、天球儀オブジェ。天球儀などの芸術的価値は、科学と神話が近かった時代の名残と言えるかもしれません。